マス・イメージ論

takaaki yoshimoto

吉本隆明

徳間書店

吉本隆明（よしもと・たかあき）
一九二四年、東京に生まれる。東京工大化学科卒。五二年、詩集「転位のための十篇」により「荒地」新人賞を受賞。著書として「高村光太郎」「言語にとって美とはなにか」「共同幻想論」「源実朝」「悲劇の解読」「空虚としての主題」などがある。

マス・イメージ論

一九八四年七月一五日第一刷発行
一九八四年八月二五日第五刷発行
定価一二〇〇円

著者　吉本隆明
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区九段南二-三-二八
〒102　電話(03)二三〇-二一三一
振替口座(東京)六-一〇五〇九七
本文印刷・製本　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
(落・乱丁本はお取替え致します)

©T. Yoshimoto 1984
ISBN 4-8288-2092-2 C0095
NDC 914 194 292P

マス・イメージ論　目次

変成論 7
停滞論 34
推理論 54
世界論 76
差異論 99
縮合論 125

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

解体論 146
喩法論 167
詩語論 195
地勢論 213
画像論 237
語相論 260

裝丁　菊地信義

マス・イメージ論

変成論

カフカの『変身』で、いちばん要めは、妹のグレーテが突然心がわりするところだ。

それまで、毒虫に変身した兄グレーゴルを愛しんでいた。毎日食べ物を部屋に運んでやったし、動きやすいように家具を片づけたり、窓から外を眺めるのに椅子をよせてやった。ほんとは妹のグレーテは虫に変わっちまった兄をみるのが哀しく気味がわるくて耐えがたいおもいなのだ。兄のグレーゴルの方もできるだけ妹に姿をみせまいと気をつかって、麻の敷布をソファのうえにかぶせて、身体をぜんぶもぐり込ませるようかくす。虫に変身した兄と人間である妹とのあいだには、一種の哀しい近親愛が呼吸している。両親が薄気味わるがってグレーゴルの部屋に足を踏みいれないはじめから、妹は虫の動きに潜む兄の人間の心を読むことができている。

虫に変身したグレーゴルの意味は、この世界がどう変成されているかという意味とおなじだ。人間の心や判断や思考をもつのに、虫の身体としてしか行為を表出できないひとつの状態が表象されているのだ。

虫という種は身体として制約し、人間という種は精神を制約する。すると虫と人間の合いの子が産まれるわけではない。グレーゴルのなかで精神としてひろがってゆく人間の身体が、身体としてひろがる虫の精神と出遇っているのだ。そしてこのばあい虫の精神は虫の身体の振舞いとしてしか表出されない。でもあくまでも虫の精神なのだ。たんに人間の精神をもった虫というのなら、その虫の世界は寓喩の世界にしかすぎないだろう。グレーゴルの虫への変身はとうてい寓喩ではない。毒虫グレーゴルというまったく新しい種が生誕して、それぞれの由緒である人間と虫との母斑をつけながら、新しい心身の世界として実現していることになる。わたしたちは毒虫グレーゴルの振舞いに痛ましさや、もどかしさを感じる。だがこの感じは、いつかじぶんが体験したことがあったとか、これからいつかきっと体験するにちがいない如実感をともなっている。これが世界の変成感なのだ。毒虫グレーゴルは虫になったいまでも、ヴァイオリンの巧みな妹を、来年は音楽学校に行かしてやろうとおもっている。これは人間みたいな心の動きだが、妹の足もとにすがりつき、なにかよい食べ物をくれるよう頼みたい願望は、もう変成された虫の思いなのだ。そして兄の虫の姿をみるのが耐えがたい妹に、麻の敷布をソファにかぶせてじぶんの身体をすっぽりかくし、妹がかがみこんだとき視えないようにと思いやる。それは人間と虫が滲透したアマルガムのものだ。

働き手グレーゴルが虫になったあとの家族は、それぞれ変容する。父親は銀行の守衛の仕事をみつけ、母親は服飾店の下請けの下着類の縫子の内職をはじめ、娘は売り子になって働くという

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ように。女中には暇をだし、家政婦が朝と夕方やってくるようになる。働きすぎで疲れきった家中の誰もが、虫になったグレーゴルをかまう余裕をなくしてゆく。妹グレーテは兄にあてがう食べ物が投げやりになる。虫になったグレーゴルも、家族が疲れや苛立ちから、じぶんを重荷に感じはじめ、いわば虫にたいする視線に変ってゆくのを感知して、ほとんど何も喰べなくなる。家のなかの一部屋を三人の間借人に貸すことで、グレーゴルの部屋は、間借人の余分な家具の置き場になってしまう。いままでグレーゴルや父親や母親たちのつどう居間には、間借人があつまるようになり、家族は台所の片隅で食事をすることになる。

ちいさな声でいえば、グレーゴルが虫に変身したために、働き手を失った服地のセールスマンの家族には、これだけの変化がおとずれる。つまり世界はこれだけ外観を変えたのだ。ひとつひとつ確かめてみれば、この変化はほんとは、ただグレーゴルが不在になった（遠い旅行、失踪、死など）ときの変化とおなじである。グレーゴルが虫になったための変化ではないことがわかる。ただ家族のグレーゴルにたいする視線が、ほんとの虫にたいする視線に変りかけてきたことだけがちがっている。だがこの世界はすこしずつグレーゴルが虫に変身したための、いわば**大変化**にちかづいてゆくのだ。

ある日台所の方から妹のヴァイオリンの音が流れてくる。間借人たちはそれを聴くと、ひかえの間まで立っていって、じぶんたちの部屋へ弾きにきてくれるよう妹グレーテにたのむ。間借人たちの部屋でヴァイオリンを弾きはじめた妹の楽音は、はじめのうち間借人の耳を惹きつけるが、

しだいに男たちはだれて、勝手な様子をしはじめる。
そのときグレーゴルは妹が可哀そうになり、「妹のそばまでかまわず進み出て、妹のスカートを引っぱり、ヴァイオリンを持って彼の部屋へ来てくれるように、という気持ちを伝えようと」妹のほうへ這っていく。
間借人たちは驚いて毒虫がやってくるのを父親に指さしておしえる。父親はグレーゴルが這ってきたと知って、三人の間借人たちをかれらの部屋に押しやる。妹は急いでヴァイオリンを弾く手をやめて、母親のヒザに楽器をあづけると、間借人たちのベッドをととのえに隣室へかけ込む。
間借人たちは父親にむりやり部屋に押しもどされたのを憤って、即座に部屋を解約すると宣告する。グレーゴルは間借人たちがじぶんを一匹の毒虫として見つけたとおなじ場所に、じっと動かないでいる。
大変化が世界に起きたのは、このときなのだ。いままで虫に変身した兄グレーゴルを愛してきた妹は突然変貌する。

「おとうさん、おかあさん」妹が話のいとぐちに、とんと手でテーブルをたたいて言った。「こんな調子ではもうやっていけないわ。おとうさんおかあさんにはわからないかもしれないけれど、わたしにはちゃんとわかっているの。こんなばけものみたいな虫の前で、おにいさんの名を口にするのはいや。だから、こういうより仕方ないけど、こいつからはなれる算段をし

なくちゃいけないことよ。だって、わたしたち、こいつの世話をし、こいつのことを我慢するのに、人間としてできるかぎりのことはして来たわ。だから、今こいつを棄てたって、これっぽっちもわるく言うひとなんかいないはずよ」

「娘のいうことはもっとも千万だ」と父親がひとりごとのように言った。相変わらずまだ十分呼吸ができないでいる母親は、目をあらぬかたに据えたまま、口に手をあてて陰気な咳をしはじめた。

妹は母のところへ急いで行き、額の下に手をあてがった。父親は妹の言葉によって何か考えついたらしく、しゃんとすわり直して、間借人たちの夕食の皿がちらかっているテーブルの上で、彼の守衛の制帽をいじくっていた。そしてときどき、じっと動かないでいるグレーゴルの方を見やった。

「どうしてもこいつからはなれるように考えなくちゃいけないわ」と、妹は今度はもっぱら父親に向かって言った。母親は咳で何もきこえないのだ。「こいつはあなたがたふたりを、きっと殺してしまうわよ。それが目に見えているわ。わたしたちのように、たださえひどい労働をしているものが、家に帰ってまでこんなひどい苦しみを味わって、いつまで耐えていけると思う？　わたしだって、もう辛抱できないわ」そう言ったかと思うと、彼女はわっと泣き出した。

（カフカ「変身」高安国世訳）

ここで何が妹グレーテに起ったのだろうか。ヴァイオリンを間借人たちのまえで演奏する行為で流露したエロスをグレーゴルにさまたげられ、突如としてグレーテは兄妹相姦的な愛を冷たい憎悪に変貌させたのだ。

兄の部屋にのこされた一匹の毒虫を、いままで虫に変身した兄、あるいは兄がある朝突然虫に変身したものと見做して愛しんできた。だがいま兄への兄妹相姦的なエロスの息苦しさを断ちきる意志が妹グレーテを支配する。もっと近親でない他者にむかうエロスにめざめる。それにはどうすればいいのだろうか？「あいつが（毒虫が—註）グレーゴルだっていう考えを棄てさえすればいい」のだ。兄の部屋にいままで住みついていた一匹の虫は、ただの虫で、兄が変身したものあるいは変身した兄とおもわなければいいのだ。

いつのまにか巨大な毒虫に変身しているのに気づいたグレーゴルの自己認知と、虫をグレーゴルと見做してきた妹や家族の認知とは照応している。妹が虫がグレーゴルだという考えを棄てさえすればと父親や母親に説いたとき、この妹の突然の認知の変容に照応するためには、グレーゴルは存在を消す（不在となる）ほかはない。そうなればグレーゴルの形見として虫（の死骸）が残されるだけだから。グレーゴルは妹を愛する心が、じぶんの身体に強いた這って妹に近寄る行為が、間借人たちに醜悪な虫の姿をみせることになり、妹の自然なエロスの流れを中絶させ、予期しないほどつよく妹を傷つけたのに驚いて、もはや妹とのあいだの兄妹相姦的な愛がおわったことを知るのだ。

ところでグレーゴルにたいする妹の突然の愛の変貌で何がいったい重要なのだろう？

妹がいうように虫がグレーゴルだという長いあいだの思い込みをやめて、ただの虫だとおもったとする。そうすれば虫がグレーゴルの化身でもかまわないのだ。そのばあい虫のほうからじぶんがいると家族たちの邪魔になると観念して「自分から逃げ出し」てくれるかもしれないから。

1、一匹の毒虫はグレーゴルとして**人間**だ

2、一匹の毒虫はグレーゴルの化身として**虫**だ

妹グレーテの愛が憎悪へ突然変貌するのに、これだけの識知の差異でたくさんである。どんなに愛する兄の化身でも、一匹の巨大な毒虫と相姦の愛はもてないし、そうすることもいらないから。

また妹グレーテにこれだけの識知の変貌があれば、虫に変身したグレーゴルという**人間**は、家族のあいだに存在できずに死に至ることは確かだ。

妹グレーテの突然の変貌は、連鎖的に別の変貌をもたらす。父親ザムザ氏は、朝食をもとめに部屋から出てきた間借人たちに向って権威ある一家の**父**に変貌する。いや家族にたいし、この世界にたいし**権威ある父**に変貌している。そして「すぐこの家を出て行ってください」と間借人たちに有無をいわさぬ威厳で宣告するのである。この父親の変貌は、さきの妹の変貌と密接なかかわりをもっている。妹が毒虫にかわった兄をただの虫だと見做そうと思いきめたのは、じぶんが兄妹相姦的なエロスを廃棄して、ただひとつの女性という性に変貌しようときめたことだ。近親的なエロスはただひとつの性ではなく不定の性の母斑によって成立っている。だが間借人との対

応のうちに、妹グレーテが眼覚めた性はただひとつの性なのだ。また毒虫グレーゴルとグレーテのあいだに兄妹相姦的なエロスが存在しえたのは、父親にどんな意味でも権威が存在しなかったからである。だがいまは妹の変貌に連動して父親は権威ある父に変貌したのだ。

グレーゴルが「ある朝、たて続けに苦しい夢を見て目をさますと、ベッドのなかで自分がいつのまにか巨大な毒虫に変身しているのに気づいた」。そこから出発するこの作品の現在性をはっきりさせるために、もうすこしさきまで、妹グレーテの変貌を拡張してみる。架空な勝手な拡張で、作品にはそんなことは毛のさきほども示唆されていない。

3、グレーゴルは不在（遠方への旅、失踪、死など）になり、あとにグレーゴルが寵愛した一匹の虫がのこされた

そうして妹のグレーテや家族たちは、グレーゴルの形見だとおもってこの虫に食べ物をあてがってやる。そこから物語がはじまる。筋書きはそっくりカフカの『変身』とおなじに進行したとしよう。ちがっているのは一匹の虫がグレーゴルとしての人間だというのでもなく、グレーゴルの化身としての虫だというのでもなく、ただグレーゴルが寵愛した形見の虫だということだけなのだ。つまりグレーゴルは不在になり、かわりに形見の一匹の虫がのこされた。

するとわたしたちはカフカの作品『変身』とは似てもにつかない平凡な昆虫愛護の童話を得ることになる。兄が不在になったあと、兄の形見の虫籠をたいせつにする妹や家族たちが、ある家庭内のささいな事件を契機に、虫を愛さなくなって捨ててしまう。どんな動機づけをしても出来

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com